

# 図書館だより

No.80 July, 2012



## 目次

巻頭エッセイ	思い出すこと	一般理科	宮地 俊彦	1
読書のすすめ	わたしのおすすめの本	機械工学科	大津 健史	2
	外村彰著「量子力学を見る」	電気電子工学科	松野 哲也	3
	佐々木常夫著「働く君に贈る25の言葉」	制御情報工学科	堺 研一郎	4
	柳田充弘著「生命科学者になるための10か条」	生物応用化学科	萩原 義徳	5
	有害図書のおすすめ？！	一般理科	伊藤 公毅	6
私の一冊		各学科学生6名		7
リレー連載「古典への誘い」	学生時代の懐かしい本	材料工学科	笹栗 信也	9
平成23年度後期図書館利用状況				10
Information	編集後記			11

# 巻頭エッセイ

## 思い出すこと



一般理科 宮地 俊彦

本年5月27日朝日新聞朝刊記事「十代、こんな本に出会った」に医師細谷亮太氏による男子一生の仕事見つけられたとしてA. J. クローニン著、竹内道之助訳、三笠書房他『城砦』が紹介されている。

それによれば、医学部に進学して小児科医にやりがいを見つけた細谷氏に、村で開業医をする父が「苦勞するぞ」と言っていたがその背中を「男子一生の仕事に値する」と押してくれたのがクローニンによる『城砦』であったと言う。

細谷氏は学生の頃この本に出会い現在も座右の書として常時手元に置いているという。

三笠書房よりクローニン全集全22巻が発刊され、第一回の配本として『城砦』が発行されたのは1967.11.30のことである。

筆者の好む言葉に「人生は瑣事に宿る」があるが、2段組394頁のこの本の定価は390円であった。現在から見れば格安であるが、当時学食の朝昼晩三食の定食の合計が165円であったことを考えれば結構な値段とも言える。ちなみに当時は外湯が常識の世界で銭湯の入浴料は回数券で一回19円、牛乳は共同購入で一本12円、学割で当時の国鉄で九州一周の代金が890円という時代であった。ちなみに、私の下宿は三食 賄い付きで一ヶ月8000円でもあった。

細谷氏の文章に触発され、さらに次の西洋の箴言を深い実感を伴って思い出したものである。「ロバは旅に出たからといって馬になって帰ってくるわけではない」。同じ時に細谷氏と同様クローニンの小説を手にして、ヒューマンイズムに貫かれたそれらに大きな感動を覚え、この作家のかなり熱心な読者とも成りはしたが、残念ながら私の場合は、それがその後の人生にながしの良い影響を与えた訳ではない。

単に面白かったという実感以外は何も残っていない読書が娯楽と成り果てているのである。

まさに読書という旅に出た私は、多くの見慣れぬ景色や考え方に会いにはしたが、決して馬になれることはなかったのである。

未だに人気の国民作家司馬遼太郎の「街道をゆく」全43巻(朝日文庫)を通勤の道中に読み返そうと実行中であるが、読めば読むほど読んでも何も覚えてはいないという正に「馬になれなかった」自分を実感させられるばかりである。しかしそのような中であって地名の類は比較的記憶に留まっていることを発見することがある。

現在はあまり聞かなくなった言葉の一つであるが「愛読書は何ですか」がある。わたしの愛読書は地名と関連することであるが「地図」と「時刻表」である。こればかりは小学生以来読み(?) 続けても飽きることがない。

さて、時刻表のことである。昭和19年時刻表第5号(12月発行で5号と言うことは戦局の悪化による物資の不足を示すものであろう)によれば当時樺太において夜行列車が運行されていたことが分かる。大泊 18:45 発 敷香 7:26 着である。現在では敷香は毎日の気象通報にボロナイスクの地名で私たちになじみの地名と成っている。

稚内、大泊間の稚泊航路の運行時刻は昭和15年のものを最後に時刻表より消えている。15年のものによれば稚内8:50発大泊4:50着である。瑣事にわたれば、この当時は時刻表表示が12時間表示であったことも分かるし、現在の24時間制に切り替えられたのは昭和17年からである。

「最果ての駅に降り立ち」と啄木が歌った釧路は

当時明治31年当時最果ての駅で根室までの鉄道は未開通であった。千島列島への渡航者はどのようなルートを通っていたのであろうか。

日露戦争後の最果ての駅は敷香であった。気象通報で聞く冬の当地の気候は厳しく、そのことが北へのあこがれを一層膨らませるのである。

## 特集 読書のすすめ

### わたしのおすすめの本



機械工学科 大津 健史

みなさん、はじめまして。本年度より、機械工学科の教員となりました大津健史です。今回、このページを担当することになり、わたしのおすすめの本と題して、以下の2冊の本を紹介したいと思います。

1冊目は、ジョージ・オーウェル作、高橋和久訳「一九八四年」(早川書房)です。オーウェルはイギリスの著名な作家で、この作品は1949年に発表されたものです。1949年から“未来の1984年のイギリスの社会”を描いています。後に、この作品は、イギリスの社会システム構築に対し強く影響を与えたとされています。実際に「街中に多くの監視カメラが設置されている」ところなど、この作品の影響を受けた部分も見られます。

「1984年のイギリス社会は、完全なる監視社会で、行動・言動のすべてが監視官である“ビッグブラザー”によって把握されている。当然、食べ物や衣服なども管理されており、贅沢は許されない。また、新聞などで見る情報や過去の歴史さえも操作されている。時に、人間のもつ感情さえも管理されてしまう。主人公のウィンストンは、この社会に対し多くの不満を感じているが、それを表に出すことは決してできない。唯一、ジュリアと過ごす時にはすべてを解放できるが、次第にその自由も彼らに見破られていく…。」

この本を読んだ後、社会、自由、罰、宗教…など、たくさんのことを考えてしまうはずです。例えば、さまざまな情報。私たちは生活の中で、テレビやインターネットなどから、多くの情報を当たり前のように受け入れています。その多くの情報の中には、本質的に間違っているものもあります。この本からの提言の一つは、“その情報の本当の意味が何かということを考えなければ、誰かの思うように誘導され、知らぬうちに間違った情報の中に閉じ込められてしまうかもしれない”、ということです。つまり、社会を生きるには、物事の本質を理解し、それを自分で評価・判断できる力が必要であることを示しています。本の中には、不平等な世界や残酷な場面の描写も出てきますが、学生の期間に一度読まれることをお勧めします。

2つ目に紹介する本は、ヘンリー・ペトロスキー著、中島秀人・綾野博之訳「橋はなぜ落ちたのか 設計の失敗学」(朝日選書)です。この本は、大学院時代にお世話になった先生から紹介していただいた本で、エンジニアの社会的役割を改めて理解した一冊です。本の中には、多くの橋の事故とその原因が詳細に示され、また、設計を行う際に重要な考え方も示されています。

この本を読んだ後、ものが壊れることには理由があり、それはすべて設計者のミスから生まれていることに気付くと思います。これはエンジニアにとって、常に意識しておくべきことです。

エンジニアは社会的責任を担ったプロの仕事をしなくてはならず、ミスや失敗は決して許されません。もし、自分の設計した製品が事故を起こした場合、自分や家族の生活が保障されなくなると同時に、会社の業績や信用、被害者家族の生活にも影響を与えてしまいます。

「設計理論に隠された欠陥を最後に暴いたのは、それらの失敗であった。」

基本的な知識、考え方をしっかり修得することも大事ですが、それとともに多くの経験、特に失敗の経験をすることは技術者にとって重要な財産です。失敗に学ぶことはたくさんあります。失敗した後に、“なぜ失敗したかを分析し、解決策を検討する”、このプロセスが基本であり、大切です。学生時代は失敗することが許されています。失敗を恐れずにチャレンジをすることによって、多くの貴重な経験が得られるはずです。

最後にひとこと。本を読むと、自ずといろいろなことを考えます。この「考えること」はとても重要なことです。私の経験からすると、これは後に何かの問題を解決するきっかけとなったり、新たなアイデアに繋がったりします。あまり深く考えずに、「読みたいと思った本を読みたいときに読む」、ということの継続が、きっと未来の自分を支えてくれるのではないのでしょうか。

## 特集 読書のすすめ

### 外村 彰著「量子力学を見る」



電気電子工学科 松野 哲也

今年5月に外村彰という物理学者がこの世を去りました。まだ70歳でした。とても残念です。

私はかつて、とある学会で外村先生の講演を聞いたことがあります。その当時大学院生だった私は、恐ろしい電源装置を用いて100[A]以上の電流を髪の毛よりも細い超伝導体の線材に流す実験をしていました。超伝導体に流せる電流の上限がどのようなメカニズムで決まるか明らかにするためです。

面白いことに、超伝導体内部では磁場は量子化された形で存在します（正確に言うと、MRI医療診断装置や核融合炉でのプラズマ保持などに用いられる超伝導マグネットのための実用線材のような、工学的応用の際に用いられることの多い第2種超伝導体と呼ばれるタイプの超伝導体の場合）。磁場が「本当の(?)」磁力線（量子化磁束しそくと言う）となっているのです。本来、磁力線は、磁場の様子を絵的に表現するための方便、つまり話をわかりやすくするためのウソだったはずですが、その磁場を1本、2本、3本というふうに数えることは通常できません。異常な事態です。実に面白い。

まるで見てきた風な言い方をしてしまいました。しかし私は実際に見たわけではありません。ところが、その量子化磁束を目に見えるようにできる、すごい技術を開発した人がいました。それが外村先生でした。私が学会の講演で初めてその映像を見たときの衝撃は今でも忘れません。量子化磁束たちが結晶構造を組んだり崩したりしながら超伝導体内を生き物のように動きまわっている様子を動画で見ることができたのです。すばらしい！

先の学会から、かなりの月日が経過したのち、表題の本を本屋でたまたま見つけた私が即座にレジに走った理由は言うまでもないでしょう。

この本「量子力学を見る」（外村 彰 著、岩波科学ライブラリー28 岩波書店1995）の副題は「電子線ホログラフィーの挑戦」です。外村先生は電子顕微鏡技術の第一人者でした。ところで、「電子顕微鏡」という言葉は結構耳にしますが、ちょっと不思議な言葉です。理科学年表を見れば電子の（ものすごく小さな）質量が記載さ

れています。電子は何かとても小さなビー玉のようなものではないでしょうか。電子というミクロな「ビー玉」を用いれば小さなものや小さな構造が見えるのはなぜでしょう。現在では、電子は波であることがわかっています。実は電子顕微鏡は波動としての電子の特性を活用する装置です。しかし物質が波である、とはとても不思議なことです。ここで紹介している本はその「不思議な世界」への入門書です。一般の人向けに書かれた本なのですが量子化磁束を可視化するという「マニアックな」話も記載されています。うれしいことです。

さて、いま私が熱意をもって取り組んでいることに電子の運動の数値シミュレーションに関する研究があります。つい先日、エネルギーの高精度保存を実現する手段としてゲージ場と呼ばれる概念を利用することを思い立ちました。うまくいくかどうか、現時点ではわかりませんが、

ところで、ゲージ場としてベクトルポテンシャルと呼ばれるものがあります。電磁気学や電波工学の教科書にも記載されている基本的概念です。このベクトル場は理論物理学的に（工学的にも）便利な道具ですが、この物理的実在については物理学者の間で長期間にわたり論争が続いたそうです。この論争に決着をつけるために、ある重要な実験を行ったのが外村先生でした。アハラノフ-ボーム効果と呼ばれる物理現象の検証実験を行ったのです。この実験では超伝導体が活用されています。この話もこの本で述べられています。面白いです。ちなみに日経サイエンス2011年11月号の記事「世界を変えた日本の頭脳 ノーベル賞に近い人たち 外村彰：ゲージ場の証拠を撮る」は無料でダウンロードできます。

ところで、現在ではwebを利用すれば様々な知識が容易に手に入るという便利な世の中です。工夫すれば信頼性が高いものを選び出すことも比較的容易でしょう。したがって今だからこそ、印刷された紙媒体の上に展開される著者の思想をじっくりと味わいながらフォローする、すなわち読書する、ことの意義がいっそう際立っているように感じられます。

## 特集 読書のすすめ

### 佐々木常夫著「働く君に贈る25の言葉」



制御情報工学科 堺 研一郎

「皆さん、こんにちは。」4月から制御情報工学科の助教に着任させていただいている堺です。今回は、表題に挙げています「働く君に贈る25の言葉」という本を紹介させていただきます。

この本の著者は東レ経営研究所特別顧問(元社長)の佐々木常夫さんという方で、約40年間企業でお勤めになられ、その間数多くの事業を成功に導いた超一流のビジネスマンです。ご結婚もされており、奥様と3人のお子様をお持ちです。しかし、長男が自閉症という障害を抱えた状態で生まれたことに加え、著者が初めて課長に就任された1984年に奥様が肝臓病を患って入退院を繰り返すようになり、さらにはうつ病を併発して3度に及ぶ自殺未遂をするなど、父親として究極なまでの辛い境遇を御経験された方です。それでも「運命を引き受けよう」「いつかいい日が来る」と自らを鼓舞して、力を振り絞りながら家庭と仕事に立ち向かわれたそうです。

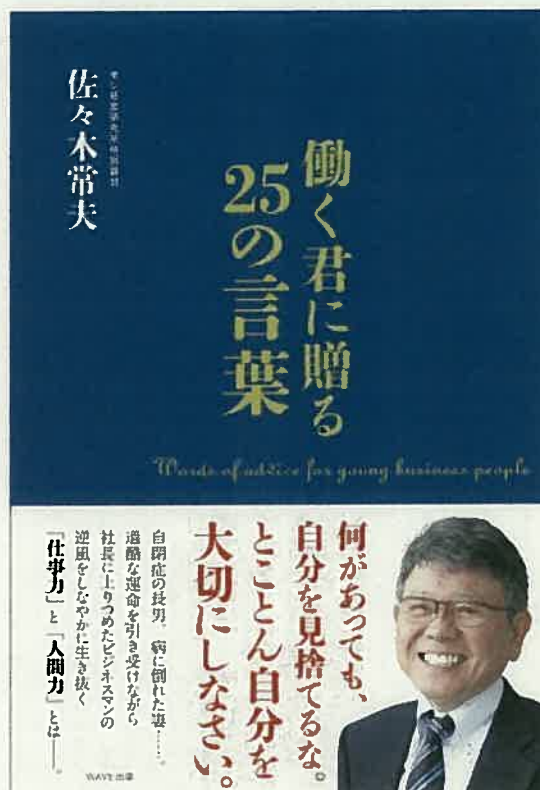
著者は、家事や子育て、奥様の看病をこなすため、毎日6時までに退社することを余儀なくされました。しかし、そんな状況でもビジネスマンとして一流の成果を上げることにこだわり、日常業務における無駄作業を徹底的に省いて、最短時間で最高のアウトプットを出すための仕事の効率を極限にまで高めることに尽力されました。その結果として、プラザ合意後の円高による業績悪化を急回復させる「再構築プラン」のほか、釣具業界の流通構造改革、3年間で世界各国に12件、計約1000億円の設備投資を実行するグローバルオペレーションなど、数々の大事業を成功に導く業績を上げ、同期トップで東レの取締役に就任されています。その後は、東レ経営研究所の社長を経て、現在は特別顧問をされています。

この本は、著者の甥っ子である遼君(仮名)が社会人になる際に、それを激励する意味で、自らの企業人としての実務経験や、家庭的な苦境を乗り越えた父親としての悟りを25の言葉にまとめて送った「手紙」の形式になっています。甥っ子に向けた手紙ではあるものの、現在の厳しい経済状況の中、将来への希望がなかなか持てずに強い閉塞感の中で働いている20代~30代の若手を気遣った著者からの日本の若者達全体へ向けたメッセージ

です。「弱い立場」に立たされた人も含めて「全ての人間を活かせ」という考え方をお持ちで、人間的にとっても温かい方だと思います。強靱な精神力を持って実績を上げられているので、強い説得力を感じます。

私が人としてこのようなレベルに達するには、まだまだほど遠いと実感する毎日で、到底敵う気もありませんが、姿勢なりともできる限り見習っていきたいと思います。

在学中の皆さんも、今はまだ学生ですが、いずれは就職する時が来ます。5年生で就職希望の人はもうすぐです。進学希望の人でも、近い将来必ず働くこととなりますので、心の準備を始める良い機会だと思って是非この本を読んでみてください。難しい講義や課題レポートに試験勉強、また毎週の実験レポート、さらには部活動や課外活動、加えて進路についての悩みなど多忙な毎日を過ごしていて大変だと思いますが、それらの課題を一つ一つ効率的に捌くための良いきっかけになるかもしれません。えらそうなことを言いながら自分自身の課題でもありますので、私もそのうち読み返そうと思っています。



## 特集 読書のすすめ



### 柳田充弘著「生命科学者になるための10か条」

生物応用化学科 萩原 義徳

今年の1月から久留米高専に勤務している生物応用化学科のハギワラです。この度の着任に伴い、自己紹介の機会が爆発的に増えました。「私の趣味は読書です。」とは口が裂けても言えませんが、時間に余裕があるときは、「あー、たまには本を読まなきゃな。」と思い、読書に勤しむことがあります。

着任後間もない1月半ば、久留米高専の図書館へ探検に出かけました。私の専門分野である生物学の棚へ向かうと、生物学に関する一般向けの本から専門書、そして実験書まで幅広く取り揃えられておりました。それらの中で目についたのが、今回ご紹介する「生命科学者になるための10か条」です。この本は今から15年ほど前の1998年に、京都大学教授（当時）の柳田充弘先生が書かれたものですが、今読んでも「ふむふむ。なるほどね。」と頷ける内容にあふれています。

高専に入学した皆さんの多くは、将来の職業像として、技術者や研究者を志しているのではないかと思います。私自身も研究者を目指そうと思ったのは、皆さんと同じ年代の頃でした。そのきっかけを書くと長くなるので詳細は割愛しますが、微生物が持っている不思議なタンパク質に魅せられたことが、研究者を志す決定打となりました。

「研究者・技術者」と聞いたとき、皆さんはどのような姿を思い描きますか？薄暗い実験室で白衣を着て、怪しげな溶液の入った試験管を振り続ける白髪ヒゲモジャの「ハカセ」でしょうか。それとも、企業の研究所でチーム一丸となって新しい技術や製品の開発をバリバリ行っている人たちでしょうか。あるいは、虫取り網を持ってジャングルを突き進み、未知なる生き物を探し続ける探検家かもしれませんね。どの分野の人たちも素晴らしい研究者・技術者です。ただし、本書で取り上げられる「生命科学者」は、大学の先生がご自身の経験を基にされた研究者像ですので、上記の中ではヒゲモジャ博士のイメージが当てはまるのではないかと思います。

さて、本書の紹介となりますが、この本にはタイトル通り「生命科学者」を目指すための10か条が書かれて

います。特に、「博士（はくし）」の学位取得を目指した大学院生活の心構えが述べられています。では、その10か条は何かと申しますと、次のように述べられています。

- ・第1条 自分なりの質問をしよう
- ・第2条 論文を読み分けよう
- ・第3条 助言と協力を得て実験をしよう
- ・第4条 実験データを人に見せよう
- ・第5条 議論に参加しよう
- ・第6条 旅をしよう
- ・第7条 研究テーマを見つけよう
- ・第8条 論文を書こう
- ・第9条 学友をつくろう
- ・第10条 学位を取ろう

生物応用化学科の学生に限らず、卒業研究を始めている本科5年生や専攻科生には把握しやすい（耳の痛い??）トピックが並んでいると思います。本科1-4年生にはいまいちピンとこないかもしれませんが、基礎実験をすでに始めているであろうから、読みこなせる箇所が少なからずあるはずですよ。進学を考えている学生はもちろんのこと、進学と就職で迷っている学生もぜひ図書館で借りて読んでみてください。皆さんはこの本を読み終えたとき、いわゆる「学者」や「博士」を取り巻く環境が今以上にイメージできるようになりますよ。間違いありません。

最近、久留米市立図書館へふらりと自転車で出かけ、貸出カードを作ってもらいました。またのんびり読書をしたくなったら、市立図書館や高専の図書館で本を借りたいと思います。ぜひ皆さんも図書館へ足を運び、素晴らしい本を見つけてください！！

## 特集 読書のすすめ

### 有害図書のおすすめ？！



一般理科 伊藤 公毅

若者が真に受けてもらってはとても具合の悪い一節というのはある。しかし、そんな一節を、名作とされる文学作品の中で目にするのは、存外多い。ここでは、そのような「有害図書」を幾つか紹介してみたい。

「与次郎はこれを評して鼻から哲学の煙を吐くと言った。」これは、夏目漱石『三四郎』の一節である。この「哲学の煙」とは何を形容したのか皆さんお分かりだろうか？答えは、煙草の煙である。この後はこう続く：「なるほど煙の出方が少し違う。悠然として太くたくましい棒が二本穴を抜けてくる。」登場人物、広田先生が煙草を吸っているシーンだ。広田先生は（旧制）高校の先生である。年の頃は中高年といったところであろう。高専にもいそうな味わい深い先生である。

次に、『佐藤春夫詩集』（角川書店）から引いてきこみよう。『酒、歌、煙草、また女』という詩の一節で、「ひともしと銀杏葉は枯れて／庭を埋めて散りしけば／冬の試験も近づきぬ／一句も解けずフランス語／若き二十のころなれや／三年がほどはかよひしも／酒、歌、煙草、また女／他に学びしこともなし」

どうですか、前半のフレーズは、学生さん（であった人）ならわかりますよね、この気持ち。後半部は…。この詩は、以下の様に締めくくられる：「若き二十は夢にして／四十路に近く身はなりぬ／人間ふまにこたえつつ／三田の時代を慕うかな。」私自身も数年たてば四十路である。共感する部分も大きい。さて、この佐藤春夫の詩で有名なのが『秋刀魚の歌』ではなからうか：「あわれ／秋風よ／情あらば伝えてよ／――男ありて／今日の夕餉にひとり／さんまを食ひて／思ひにふけると。（中略）さんま、さんま、／さんま苦いか塩つばいか。／そが上に熱き涙をしたたらせて／さんまを食ふはいつこの里のならひぞや。／あはれ／げにそは間はまほしくをかし。」ともかく、秋になって秋刀魚で一杯やろう、等というときにこの歌はぴったりだ。ところで、この作品誕生の背景には、谷崎潤一郎との女性がらみのスキャンダルでの傷心がある。というわけで、次は谷崎潤一郎から引いてこよう、といたいところだが、あまり

に「危険」なのでやめておく。

次に、『百鬼園先生言行録』から拾ってみよう。「始業の鐘が鳴ってから、五分許りのうちに、大概の先生はみんな教室に出かけて（中略）しかし、百鬼園氏は、その森閑とした教授室に、ただ一人居残って、いつ迄もふかりふかりと煙草を吹かすばかりで（中略）十分たち、十五分たっても百鬼園氏はまだ動かなかった。（中略）その後、百鬼園氏はまた新しい煙草に火をつけて、吸い始めた。」私にはとてもまねできぬが、気持ちはよくわかる。ところで、この「百鬼園先生」とは内田百閒である。「ひやくきえん」と「ひゃっけん」をかけているのだろう。この内田百閒氏であるが、長年高等教育機関で語学教師を務めた人でもある。教育に関しての随筆（というか愚痴？）にも共感させられる。

さて工科系の学校に於いては、文明とか科学技術というものは無条件に是なるものとして受けいれるべきであろう。ここに疑問を投げかけることは、矢張り「危険思想」であろうが、夏目漱石は「汽車ほど二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百という人間を同じ箱へつめてごうと通る。情け容赦はない。つめ込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまってそうして、同様に蒸気の恩沢に浴さねばならぬ。」と述べている。今まさに私はこの小文を新幹線の中でノートパソコンを使って書いている。電気の恩沢に浴しているわけだ。漱石先生は顔をしかめるであろう。この一節は、「知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。」で有名な『草枕』から引用した。

最後に…「ものを創造する人間は基本的にエゴイステックにならざるを得ない（中略）いつもまわりを見回して（中略）常にうまい落としどころを考えながら生活を送っていたら、どのような分野であれ、その人には創造的な仕事なんてまずできない」と村上春樹は『小沢征爾さんと、音楽について話をする』のなかで述べている。確かに（研究者だって）そうだけれど…そうはいかんよ、村上さん！



# 私の一冊



東野 圭吾 著  
魔球

講談社

私は幼い頃から野球が好きで、表紙の野球少年とタイトルに惹かれてこの本を手にとった。物語は主人公である武志が高校の野球チームのエースとして甲子園に初出場したシーンから始まる。武志は強豪校相手の試合で好投するも、勝負球として投げた「魔球」によって試合に敗れてしまう。その数日後、チームのバッテリーが何者かに殺害され、時を同じくしてとある会社で爆破未遂事件が起こる。この二つの事件がどう結びつくのか？武志が投げた「魔球」とはいったい何なのか？思春期の青春と心の闇をリアルに描いてあり、事件の真相を知ったときは驚きと悲しみで胸が締め付けられるようだった。ぜひ万人にお勧めしたい作品。

(機械工学科5年 中林 広明)

【図書館所蔵情報】 913||Z-H||13



カール・セーガン 著、池 央 耿 訳、高見 浩 訳  
コンタクト (上)、(下)

新潮文庫

このSF小説の主人公は地球外知的生命体からの信号をひたすら探す研究者である。研究者であるから科学的に客観的に実証されないものは認めないという立場である。不思議な縁で主人公は生命体と接触するための転送器の乗員に選ばれる。そして、それに乗ってある生命体とコンタクトをする。しかし、転送器をモニターしていた人達には、転送が失敗だったと主人公はいう。主人公は科学者でありながら、最後には「私は本当に生命体と会い素晴らしい体験をした。でもその体験を証明することはできない」と言う。信じることの色々な面を考えさせる言葉である。

(電気電子工学科3年 野村 健太郎)

【図書館所蔵情報】 ◇購入予定



谷合 竜典 著  
高専生×英語のカンケイ

東京工業高等専門学校

私がおすすめる一冊は「高専生×英語のカンケイ」である。この本はある高専生がTOEIC900点をとった話なのだが、中身は英語の勉強方法については詳しくは触れず、主に著者の高専生活について書かれている。その中身は留年からTOEIC900点、海外留学や文化祭など様々な高専生活が描かれている。私はこの本を読み、高専とはこんなにも素晴らしいことができるのかと衝撃を受けた。それ以来、自分もこのようなかっこいい高専生になりたいと気持ちが大きく変わったことを覚えている。現状に不満がある高専生には特に読んで欲しい。きっと素晴らしい高専生活をおくることができるのではないかと思う。

(制御情報工学科5年 嶋田 健汰)

【図書館所蔵情報】 830||Z-T||15







# 私の一冊



桜庭 一樹 著

砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない

富士見書房

私がこの本を読み終えた時、言い難い切なさに苛まれたのをよく覚えている。だが、この物語の結末自身は、一つの記事によって最初に語られる。“海野藻屑という少女がバラバラの遺体で発見された”という記事によって。

物語の本幕は、記事の後に上がる。主人公、山田なぎさの通う中学校に海野藻屑が転校してくる場面からだ。つまり、この時点でこの先綴られていることの全ては過去の話となっているのである。現実的な主人公と、自分是人魚だと主張する藻屑。すれ違う二人だが、徐々に友情が芽生え始める。なぜ藻屑は死んだのか、その背景のすべてを知った時、きっとあなたも同じ感情に苛まれるだろう。

(生物応用化学科3年 山内 実佳)

【図書館所蔵情報】 913||S||183



穂村 弘 著

世界音痴

小学館

音痴、方向音痴、運動音痴、味覚音痴…そう称される者たちは自分の感覚が他人とずれていることを自覚しているし、その溝を埋めようと努力する。しかし、どんなに努力していても大体の〇〇音痴は周りからおかしい、と笑われてしまう。著者、穂村弘はその中でも異色を放つ「世界音痴」を自称している。このエッセイ集ではそんな著者の日常が面白おかしく、軽快な文章で書かれてある。どの話もユーモアに溢れており、1話2ページほどで非常に読みやすい。世界音痴の見えている世界は私たちの日常とはやはりずれていて、あなたは、「変な奴だ。」と笑うだろう。でも、この本を読み終えたあなたは絶対に思う。「普通」ってなんだっけ？

(材料工学科4年 小山 優梨)

【図書館所蔵情報】 914||Z-H||2



三橋 貴明 著

コレキヨの恋文 新米女性首相が高橋是清に国民経済を学んだら

小学館

大正バブル崩壊、関東大震災、三陸大津波、ウォール街株式大暴落、頻繁に変わる総理大臣、デフレ不況。1920年代、高橋是清(コレキヨ)が生きた時代と現代の日本は驚くほど同じ状況であった。本書は、7回の大蔵大臣と首相を経験した「高橋是清」が、若き女性総理大臣「さくら子」に国民経済を説く物語となっている。マクロ経済学の基本的な概念について、二人の対話形式で分かり易かつ丁寧に解説されており、非常に読みやすい構成になっている。「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という諺があるように、歴史を顧みるといふ行為は問題を解決するために有効な手段である。是清を通して、今の日本が行うべき事が見えてくる。

(専攻科機械・電気システム工学専攻1年 見良津 黎)

【図書館所蔵情報】 ◇購入予定



# リレー連載「古典への誘い」



材料工学科 笹栗 信也

## 学生時代の懐かしい本

古典への誘いとの題名で執筆の依頼を受けた。一般文科の人ならいざ知らず、私がイメージする古典に類する本については、ほとんど読んだことがない。自分の専門についてみても、果たしてどこまで遡ると古典といえるのか、私が関係した本にそれに属する本があるのだろうかと思ったのが、そのときの印象である。とくに定義もなさそうなので、ここでは学生時代を懐かしんで、思い出深い二冊の本を紹介する。一つは、幸田成康氏の「金属物理学序論」である。これは今もコロナ社から発売されており、数年前まで当学科の教科書として使用されていた。約40年前の学生時代に購入して以来、いまだに私の書棚の前面に鎮座し、何かあればすぐ開いて見る。当時金属に関する専門書は多数あったが、教科書とするほど安いものではなかった。講義はノート講義か金属学会出版の通常赤本と言われていた読みづらい本で進められた。そんな時代に本書は教科書として最初に手にした一般出版社の専門書であり、非常に新鮮で気持ちがわくわくしたことを覚えている。題名は「金属物理学序論」となっているが、その多くを金属の「転位」に費やしている。材料工学科の3学年になると転位についての講義を受けるので、この言葉に違和感を持つ人は少ないと思う。しかし、他学科の人はなんだろうと思うかもしれない。金属材料中にはさまざまな欠陥があり、その一つが転位で、整然と並んだ金属原子の並びに不連続な部分が存在する箇所を言う。金属材料に力が加わったときに、変形が起こる。このとき変形は転位が動くことによって生じる。なぜ材料が強いのか、変形はどうして起こるのか、破壊も含めていろいろな現象の説明に転位の挙動があげられる。転位に関する概念が出てきたのが1934年頃からで、本書の初版は1964年である。この授業を受けたとき、同級生の父親（大学教授）が若いころ、転位とは何かと、若い研究者が寄り集まって外国の文献をもとに勉強会を開き、喧々諤々議論をしていたと聞き、この分野は比較的新しい学問なのだったことを思い出す。同級生の父親が勉強会を開いていたころ、今では誰もが当たり前の刃状転位やらせん転位、混合転

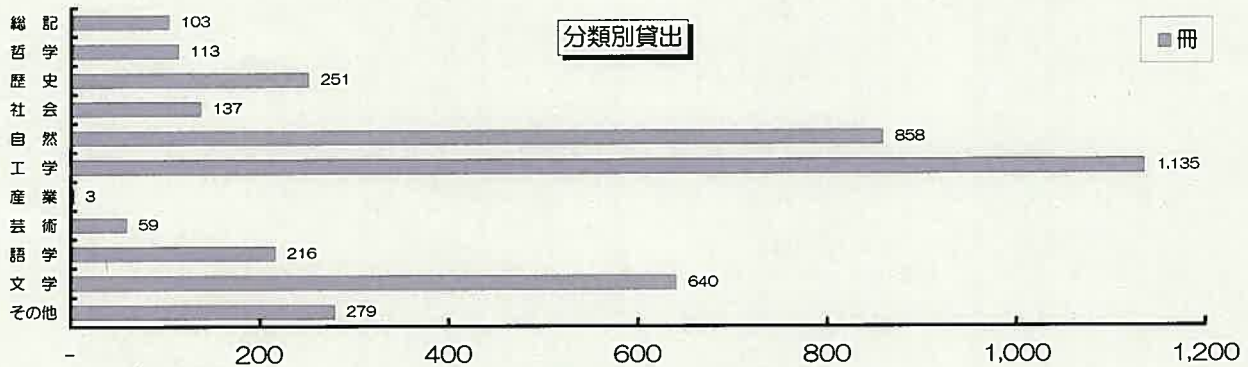
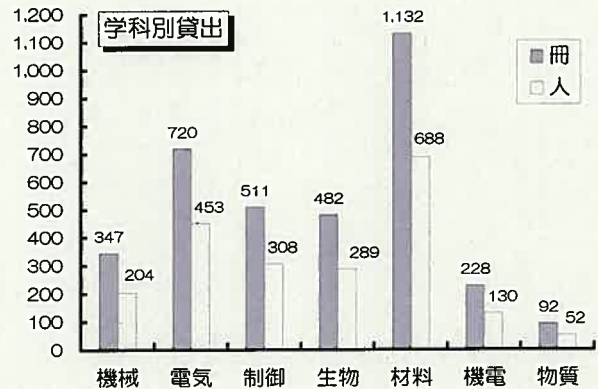
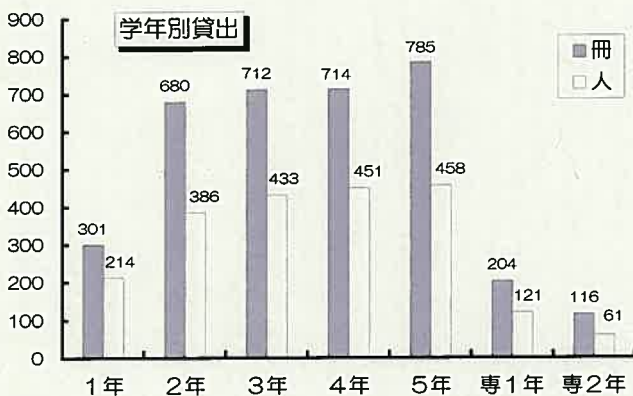
位などがよく理解できなかった等の話を聞いて、私が理解できないのも当たりまえだと、勉強不足を正当化していたものである。また、授業で本書と先生の式が違っており、準備不足の先生が立ち往生したことを思い出す。このことが私の頭から離れず、授業前の準備を怠らないことを心がけている。本書にはあまり数式が使われておらず、平易に記述されているため、金属物理学の入門書としては最適である。

次は「金属の凝固」（丸善）で、これは小職が自ら買い求めた本である。金属製品の作り方には、圧延、鍛造、切削などいろいろな方法がある。金属を溶かして型の中に入れて作る方法もその一つで、鑄造と呼ばれる。溶けた金属は冷却し、固まって製品となる。このとき金属が固まる現象を凝固と呼ぶ。金属がどのように固まるかは複雑で、合金になるほどその度合いを増す。鑄造技術は貨幣や青銅器が作られた時代からあるため、極めて古い技術であるが、金属の凝固に関する研究が本格的に進められたのは、それほど古くない。転位論と同じように1940年代からと思う。新しい科目として講義が行われたのは、大学3年のとき、約40年前である。もちろん教科書はなく、ノート講義であった。溶けた金属は冷却すれば固まり固体になると単純に思っていた学生が、金属が固まるということがこんなに複雑で、面白いものかとの分野に興味を持つきっかけとなり、研究室の輪講で外国の論文や原著の一部を読んだ。本書はそのころ翻訳本として出版された。初版は1971年で、原著者は金属の凝固では大変に有名なBluce Chalmersである。金属が液体状態から固体になるときのどのような形態とるのか、何故そのような形態になるのか、凝固とともに固体及び液体中で溶質濃度がどのような変化するのか等が記述されており、本書は金属凝固を学ぶための基礎となる本である。良い製品を作るには生まれ（凝固）が大事である。材料工学科の学生には少々難しいかもしれないが、書棚に飾っておいても悪くない本である。

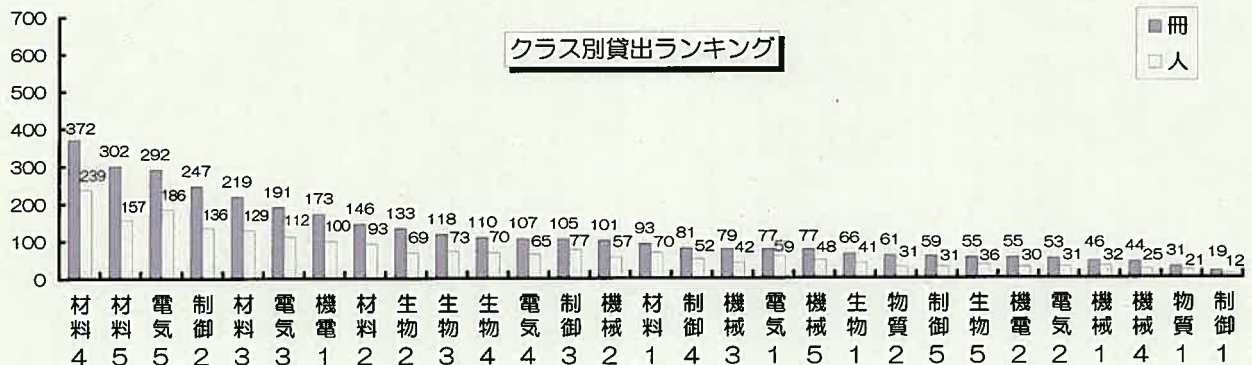
# 平成23年度後期 図書館利用状況

## ◆開館日数及び入館者数

月	開館日数	入館者数				一般利用者数 (内数)	一日平均入館者数 (四捨五入)	開館時間
		平日		土曜日	合計			
		時間内	時間外					
10	25	2,147	335	115	2,597	28	104	平日(時間内) 9時~17時
11	23	2,301	834	222	3,357	12	146	平日(時間外) 17時~20時
12	21	2,360	515	81	2,956	11	141	土曜日 9時~17時
1	22	2,480	634	101	3,215	25	146	※冬季及び学年末休業期間は平日(時間外) 閉館、土曜日休館
2	24	3,186	901	190	4,277	26	178	
3	23	1,169	72	126	1,367	15	59	
合計	138	13,643	3,291	835	17,769	117	129	



※ 分類別貸出冊数には、教職員及び一般利用者貸出冊数を含む。



# Information

図書館改修に伴う移転のため、夏季休業期間中は図書貸出ができませんのでご注意ください。



## ◆特別(長期)貸出について

夏季休業期間中の特別(長期)貸出を下記のとおり行います。

- ・貸出期間：7月9日(月)から7月19日(木)まで
- ・返却期日：9月7日(金)
- ・貸出冊数：5冊以内

(一般利用者及び教職員は通常貸出です。)

## ◆図書館改修に伴う図書館業務の変更のお知らせ

- ・図書館閉鎖：7月20日(金)から3月31日(日)まで
- ・仮図書館開設：9月3日(月)

夏季休業期間中は図書館の利用(閲覧ならびに貸出)ができません。

同期間中の図書の返却については学生課に設置の返却ボックスを利用してください。

## ◆仮図書館について

仮図書館は、専攻科棟1階創造工学実験室です。

- ・月曜日～金曜日は、9時から20時まで開館
- ・土曜日は、9時から17時まで開館
- ・日曜、祝日は休館



## ◆◆図書館からのお願い◆◆

図書館改修に伴い、専攻科棟1階創造工学実験室が仮図書館になります。

改修期間中は一部の本しか閲覧、貸出ができません。

暫くの間ご迷惑をおかけしますが、御協力の程よろしくお願い致します。

## 《編集後記》

こんにちは制御科の中野です。今年の夏は、図書館改修工事が行われます。新しい図書館がお目見えするのは来年の春だそうです。楽しみですね。夏休みに図書館が利用できないぶんは上述の長期貸出手続きを活用してくださいね。

さて、本題の今回紹介する本は、シーナ・アイエンガー著「選択の科学」です。著者のアイエンガーは、盲目のインド人女性で、コロンビア大学の社会心理学教授をされています。この本では、女史が「選択」に関する調査や実験を通して得た知見を、学生に語り聞かせるような表現で説明しています。一つ一つの調査や実験は、些細ともいえる

事象の証明に過ぎないのですが、それらを積み上げた本書からは、「選択をするということは、すなわち将来と向き合うこと、選ぶことこそ力につながる。」という女史の原動力ともいえる信念を強烈に感じ取ることができます。

夏休みの幾許かの時間を読書に充てる、それとも読書よりももっと魅力的な何かをする?何気ない時間を有意義なものにできる「選択」ができるかと素敵ですね。選択の一つとして夏休み用の長期貸出手続きを利用してはいかがでしょうか。図書館でお待ちしております。

(図書主幹 中野 明)

発行日：平成24年7月9日

発行・編集：久留米工業高等専門学校図書館 Tel：0942-35-9306 Fax：0942-35-9206  
〒830-8555 久留米市小森野一丁目1番1号 E-mail：L-staff.SAD@ON.kurume-nct.ac.jp